

A 国 語

(50分)

答えはすべて **解 答 用 紙** に書き入れること。

【この冊子について】

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子に手をふれてはいけません。
2. この冊子の 2～3 ページは白紙です。問題は 4～15 ページです。
3. 解答用紙は、冊子の中央にはさまっています。試験開始の合図後、取り出して解答してください。
4. 試験中に印刷のかすれやよごれ、ページのぬけや乱れ等に気づいた場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
5. 試験中、冊子がバラバラにならないように気をつけてください。

【試験中の注意】 以下の内容は、各時間共通です。

1. 試験中は先生の指示にしたがってください。
2. 試験中、机の中には何も入れないこと。荷物はイスの下に置いてください。
3. 先生に申し出ればコート・ジャンパー等の着用を許可します。
4. かぜ等の理由でハンカチやティッシュペーパーの使用を希望するときは、先生の許可を得てから使用してください。
5. 試験中に気持ちが悪くなったり、どうしてもトイレに行きたくなったりした場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
6. 試験中、机の上に置けるのは次のものだけです。これ以外の物品を置いてはいけません。
 - ・黒しんのえん筆またはシャープペンシル
 - ・消しゴム ・コンパス
 - ・直定規 ・三角定規一組 (10cm程度を目盛り付き)
 - ・時計 ・メガネ筆箱も机の上には置けませんので、カバンの中にしまってください。
7. 終了のチャイムが鳴り始めたら、ただちに筆記用具を置いてください。
8. 答案を回収し終えるまで、手はひざの上に置いてください。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

□
のやまきり

野山彬は、文林館という出版社で、小学生向けの雑誌である学年誌を担当しています。昭和四十三年春、彬が編集を担当している有名漫画家の戸塚治虫から児童文学作家の佐野三津彦を紹介してもらい、話を聞くことになりました。彬は、三津彦の書いた小説をあらかじめ読んでから会いに行きます。以下の部分は、彬と三津彦が喫茶店に入ってから場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、「Ⅱ」は、直前の部分の説明です。

「で、なにが聞きたいんだっけ」

間近で改めて見つめられると、ぞくりとするような迫力がある。

「児童文学について教えていただきたいんです」

彬は居住まいを正した。

「あんた、学年誌の編集だっけ」

「はい」

「ふーん」

ウエイターにコーヒーを二つ注文してから、三津彦が頬杖をついた。

「児童文学を学ぼうっていうのは、学年誌の編集者としては殊勝な「Ⅱ感心な」心掛けだね」

「つやくようにそう言くと、ものう物憂げに目蓋を閉じる。それからしばらく店内に流れるジャズを聞いているようだったが、やがてゆつくりと眼をあけた。

「あんたは学年誌をどんなものだと思うてる？」

反対に質問されて、彬は一瞬言葉に詰まる。まさか、本意の仕事ではないので、いずれ辞めるつもりだとは言えない。

「児童に興味をもたせる編集をして、読むこと、書くこと、新しく創り出す力を養い、一人で学ぶことの楽しさ」を身につけてもらいたい……というのが、創始者の発想だったそうです」

新入社員研修で読まされた社史に書かれていた文言を、彬は口にしてみる。貧しい家庭環境に育ち、小学校しか出ていない初代社長自身が、独学の人だったのだそうだ。

「一人で学ぶことの楽しさ、か。実にいいね」

別段皮肉な様子もなく、三津彦が淡々と続ける。

「で、文林館の学年誌が、本当にそれを実践できてると思う？」

改めてそう問われると、彬は内心首を傾げた。

編集長の畠田も、先輩編集者も、執筆陣である戸塚たちも、そして自分自身も、懸命に仕事に取り組んでいる。編集企画前に学校訪問をし、先生や児童たちから直接意見を聞くことも怠っていない。発行部数も、実売部数も、右肩上がりに伸びている。しかし、テレビ先行のブームにどうしても偏りがちな現在の編集方針が、本当に「一人で学ぶことの楽しさ」につながるっているのかどうかは定かではない。ブームというのは、結局、集団が作り上げるもので、決して一人ひとりのニーズ「II要求」に応えるものではないからだ。

「……よく、分かりません」

彬が正直に答えると、三津彦がにやりと笑った。

「児童文学も同じだよ」

運ばれてきたコーヒーを片手に、三津彦は少し真面目な顔をする。

「学年誌にせよ、児童文学にせよ、不特定多数の子どもを相手にするということは、子どもとはなにかということを、繰り返し繰り返し、考え続けることだ。それはすなわち、俺たちの今後の行く末を考えることにつながる」

「今後の行く末……」

「そうだよ」

ブラックコーヒーを一口啜り、三津彦は光る眼で正面から彬をとらえた。

「人間……ヒト属の歴史は、百万年前の洪積世初期に始まるらしい。ほかにも色々な説はあるけど、とりあえず、俺はその説をとる。なんせ、この時期の数万年なんて、瞬き程度の誤差でしかないからな」

かちりと音を立てて、三津彦はカップをソーサーに置く。

「だけど、子どもを一人の人間として認める近代的な考え方が生まれてきたのは、世界的に見ても、ここ、たった百年くらいの

ことだ。このことを、よく考えてみるよ。数万年が瞬き程度の誤差でしかない途方もない長い時間を生きてきた人間が、子どもの人権に気づいてまだたった百年なんだぜ」

「子宝」という言葉は日本にも昔からあるが、それこそが、子どもが家の所有物であったことの証拠だと、三津彦は続けた。

「家の所有物だった子どもが、戦中には国家権力の従属品としてどんなふうにあつかわれ、どんなふうに見捨てられてきたかは、戦災孤児（「戦争によって親を失った子」）だった俺はもちろん、特攻隊上りの今の文林館の社長だって、よく知ってるだろうよ」

「ええええっ！」

大事な話の最中なのに、彬は奇声を発してしまふ。

特攻隊上がり？ あの大いしそうな社長が？

「なんだ、お前、知らなかったのかよ」

あきれたように、三津彦が溜め息をつく。

「とにかく、人間の歴史は百万年、賢い人間と呼ばれる種に進化してからも数十万年が経つていうのに、子どもの人権が認められるようになってきたのは、わずか百年。その百年も、社会情勢によつては簡単に覆るのが現状だ。未熟も未熟。近代の子ども観については、我々自身がまだ赤子であることを認めざるを得ない」

しかし、人格は間違はなく子どもの中にも備わっているし、子ども時代を経ることなしに、大人になることはありえない。にもかかわらず、大人たちがそのときに拠っている社会情勢や権力に合わせて子どもを鋳型に当てはめるように育てれば、子どもはそもそも備わっている能力や個性を十全に発揮することができない。

「だから、長きに亘つて同じような歴史が飽きるほど反復される。根本は、そこなんだよ」

人間の歴史は百万年。子どもの歴史は百年。

三津彦はそう繰り返した。

近代の子ども観に関しては、人類もまた、ほんの子どもなのだと。

「分からなくて当然だ。原人だった頃から、百万年かけて凝り固まってしまった観念を、ようやく変革しようと重い腰を上げて、まだたった百年なんだから」

コーヒを飲み干し、三津彦はすぐにウェイターを呼んで二杯目を注文する。

「だからこそ、俺たちは考えなければいけない。鋳型にはめられないよう、自分の頭でしつこく考え続けなければならない。ア、それが児童文学の仕事だと、俺は思っている」

長い前髪の下、小さな黒い瞳が鋭い光を放った。
たった百年――。

繰り返された言葉が、彬の胸の奥に落ちていく。

それからしばらく、三津彦も彬も黙って店内に流れるジャズと周囲の喧騒を聞いていた。

ふと、三津彦の口元に皮肉な笑みが浮かんだ。

「戦後、『鐘の鳴る丘』ってラジオドラマが随分流行ったみたいだが、当時、地下道を這いずり回っていた本物の浮浪児だった俺は、そんなもの、一度も聞いたことがない。でも、たまたま金が入ったときに、伊勢佐木町の劇場で映画版を見たことがあったね」

小説に書かれていたエピソードだと、彬はどきりとする。

「見終わったとき、恥ずかしいほど涙が出たよ」

感動して泣いたのではない。

自分自身の現実とあまりにかけ離れすぎていて、情けなくて涙が出たのだと、三津彦は眼を眇めた。

「そのときに思ったね。このドラマや映画で、世間は『浮浪児』の問題を片付けようとしているんだと。戦災孤児には、『緑の丘の赤い屋根』なんていう御大層な施設がある。その思い込みだけで、この問題は解決だ。実にお手軽なものだ」

「鐘の鳴る丘」が大好きだった彬にとっては、耳が痛い話だ。

「あのドラマが、戦後の子どもたちに大きな希望を与えたというのは事実だったろうよ。でも、それは保護者のもとで、毎日ラジオを聴けた子どもたちであって、俺たち本当の孤児は、そこには含まれない。あのドラマによって、『緑の丘の赤い屋根』の下に住めない俺は、『二重に捨てられた気分になった』」

その言葉に、彬はうつむくことしかできなかった。

「戦後の児童文学の代表を『ビルマの豎琴』だという向きもあるが、それに関しても、俺は同じようなことを感じるね」
ウエイターから新しいコーヒーを受け取り、三津彦は続ける。

「あの戦争の責任を、水島上等兵一人におつかぶせて、先へ先へと進んじやっちゃ駄目なんだ。別に作品自体が悪いわけじゃない。ただ、戦争責任を曖昧にしておきたい連中が、あの作品を利用しているのが気色悪い。そいつは、ただの思考停止じゃないのかね。俺に言わせれば、あれは児童文学とは言いがたい」

二杯目のコーヒーに口をつけながら、三津彦が横目で彬を見た。

「その点、君嶋織子はすごいぜ。優しい文体だけれど、ぎよつとするようなことを淡々と書いてくる。思考停止からは程遠い」
君嶋織子——。彬も名前だけは知っている。

数々の賞に輝く、現在大躍進中の女性児童文学作家だ。

「戦争中、華僑〔中国以外の地域に住む中国人〕の女生徒を防空壕から追い出して、死に至らしめるような差別の話もある。庶民だって、全員が全員、戦争の被害者つてわけじゃないからな。近所の人間を、特高に密告するような連中もごまんといたわけだ」
児童書にしては残酷すぎるのではないかという批判がないわけではないが、君嶋がそういうリアリズム〔事実をありのままに写し出すとする立場〕を徹底するのは、その実、子どもを信頼しているからだろうと、三津彦は語った。

「割烹着を着たおふくろさん連中が諸手を挙げて支援していたのは、そもそも侵略戦争だ。君嶋はそこからも眼を逸らしていない」

一旦言葉を切り、三津彦はコーヒーを啜る。

「確か君嶋はまだ無名時代に、文林館の学年誌の仕事をしてるはずだよ。いくつか読んで、俺は感心した覚えがある。『赤ずきんちゃん』のリライト〔目的に合わせて書きなおすこと〕で、狼に吞まれる赤ずきんの痛みを生々しく書いたのは、彼女だけなんだ」

『『良い子のひかり』！』

思わず彬は大声をあげてしまった。

「この時期に翻案〔リライト〕された童話は、よいものが多いです。書き手が優秀でしたからね」

つんと取り澄すました松永総務課長の顔が浮まつかんだ。

「『赤ずきんちゃん』には、ペロー版もあつて、そつちでは赤ずきんは狼にむしやむしやと食べられて終わるんだ。それでは酷ひどすぎるだろうと、グリム童話では、お腹なかから救い出されるけどね。甘あまったれた結末だけにしないところが、君嶋らしくて面白おもしろい。なんでもお手軽に済まそうとしないところが実にいい」

そう言われれば、赤ずきんちゃんが苦しむところが、彬も印象に残っていた。

「君嶋は、俺より少し上の世代だけど、ああいう誠実さは本気で見習いたいと思うよ」

二杯目のコーヒーもあつという間に飲み干し、三津彦は胸ポケットからメモを取り出す。

「ほかに、読むべき児童文学作家は何人かいる」

数人の名前を書きつけ、メモを破つて彬に差し出した。

「この人たちの作品を読めば、あんたの知りたいことも少しは分かるかもしれないね」

コートを羽織り、三津彦が立ち上がる。

「じゃあ、俺はいくから。勘定は任せかんじようるわ」

「ありがとうございました」

(古内一絵『百年の子』より)

問一 ― 部ア「それが児童文学の仕事だ」とありますが、三津彦は「児童文学の仕事」についてどのようなことを重視していますか。説明しなさい。

問二 ― 部イ「二重に捨てられた気分になった」とありますが、「捨てられた」は、一つには「戦争で保護者を奪^{うば}われて孤児になったこと」という意味だと考えられます。もう一つの意味を説明しなさい。

問三 ― 部ウ「ああいう誠実さ」とはどういうことですか。説明しなさい。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、「Ⅱ」は、直前の部分の説明です。

ア 「伝わらない」ということは悲劇であり喜劇である。

数年前、大学で国際交流を兼ねた小Ⅰキボのシンポジウム「Ⅱ研究討論会」がひらかれた。台湾、シンガポールから論者が集い、彼らの話をきくために日本からも数十人、狭い教室に集まった。主催である上智大学の先生が、開会の言葉を述べる。シンポジウムは基本英語で行われるが、日本語話者がほとんどではあるので、事務的な指示は日本語で行い、発表者の英語も、簡単な逐次通訳をいれると説明した。先生の隣に立つ台湾とシンガポールの研究者は、にこにこそれをきいている。もちろん、日本語は話せない。だからこそ、日本語のふしぎな音のひびきをただ楽しんでいられるようにも見えた。

大学の教室は不必要にⅡムキシツで、蛍光灯が明るすぎるといつも思う。先生はその教室で、注意事項や趣旨を伝えつづける。

「あとですね、この中で、英語じゃないとこまるよって方いますか？」

先生が真剣な表情で聴衆に問いかけた。わたしたちはそれをぼうつときいている。蛍光灯は相変わらずぴかぴかと光っている。

「英語じゃないとこまるよ、って方！」

先生が手を挙げて、会場をぐるりと見回す。心配そうだ。誰ひとり、置いてきぼりにしないように配慮しているのだろう。やさしいなあと思う。わたしたちも振り返ったりして、こまるひとを探す。誰も手を挙げていない。先生の隣に立つふたりは、まだにここにこしている。

「あつ」

先生が何かに気づいたように息をもらして、手を下げる。「いやそれは」と誰かの声がする。「日本語なので、伝わらないのでは」。

わたしたちは先生の隣に立つふたりを見つめる。ふたりは穏やかに微笑んで、わたしたちを待っている。

あるいは、こんなこともある。哲学科のリサーチ・アシスタントをしていたころ、先生が書籍を購入したので、検収センターで確認をしてきてほしいと言った。細かい説明は省くが、大学の予算で何かを購入するときは、検収を受けなければならない。何号館の3ウラガワあたりにあるはずだと先生は言って、わたしを送り出した。

研究棟を出て大通りを歩く。わたしの大学はいつも風が吹いていた。ビル風なのだろうか。新入生のオリエン（「新入生向けの説明会」）で、あまりにも風が吹くから、誰かが案内する先輩に「いつも風が強いんですか」とたずねた。先輩はそれを詩的な質問だと受け止めて「面白いことをきくね」と動揺していた。

風に服がはためいてしまう。髪の毛がバタバタと音を立てて、わたしの顔にかかる。検収センターは小さいせいが見つけづらく、建物のまわりをうろろしななければならない。ドールハウスであれば、手にとつて、くると手の中でまわすことができる。代わりにわたしが、くると建物の外側をまわる。難儀だと思う。

ようやく入り口を見つける。自動ドアが開くと、自分の狭いアパートと同じ広さなのではないかと心配になるような小部屋が出現する。職員さんが受付に近づいて、やりとりをする。「コピーをとるのでお待ちください」と言われ、書類が机からがさつとぬぐいさられる。

何もなくなった受付の机には、紙が貼つてあった。がちやりとコピー機の蓋を持ち上げる音をききながら、わたしは机を見つめる。それは地図のようだった。

「ここが検収センターです」

簡単な大学の構内地図に、検収センターがある建物が描いてある。正門や北門との関係性も4メイズ⁴と書かれており、どこから検収センターに入ることができるのか矢印が印刷されていた。矢印の先には吹き出しで「ここが検収センターです」と書かれている。だがすでにここが検収センターなのだった。わたしはすでに辿りついている。探しているあいだ、地図はどこにもなかった。代わりにここにあったのだ。検収センターの受付の机に貼り付いていた。

お待たせしました、と職員さんが書類を手にして帰ってきた。地図の上に書類を置いて、どん、どん、どん、どん、とハンコを押

した。どうぞ、と手渡された紙を受け取って、わたしはありがとうございます、と言った。

ほとんどの場合、何かの思いが完全に伝わるということはない。「わかりあう」ということは不可能であると信じられている。にもかかわらず、わたしたちは思いが伝わっているはずだと思い込んだり、そもそもの可能性を忘れてしまったりして生きている。

それどころか、伝えようとする事それ自体すら、脱臼していることもある。最初から失敗している試み。横断歩道をついに駆け寄り、肩に手を置くと、まったく見知らぬひとが振り返る。その驚きと、恥ずかしさと、可笑しさ。伝えるという行為に対し、あまりに意識的でなかったことにも気がつく。

だが今度は伝えることを意識すると、わたしたちは途端に臆病になる。弱々しくふるえて逡巡し「ためらい」、落ち着かなくなる。

心が心を求めつつ
濁流にイ魚は閉じるまぶたを持たず

(千種創一)

わたしたち人間が持つまぶたを、魚たちは持っていない。彼らはまぶたを閉じることはしない。静かな目つきで、濁流の中を泳ぎまわっている。それに対しわたしたちは、簡単にまぶたを閉じることができてしまう。濁流の中で、きつく目を閉じて、誰のことも見ずに、口もひらかずに、押し黙ることができてしまう。それはわたしたち人間にゆるされた自由であり、不自由さでもある。魚たちは見ている。互いを見ている。見ないことはできない。濁流から這い出ることもしない。彼らに心はあるのかわからない。心がないからこそ、いつまでも見つめ合うことができるのかもしれない。わたしたちは心があり、心を求め、閉じるまぶたを持ち、それゆえ閉ざしてしまふことができる。

心を求め、何かを伝えることは、たとえば壇上から何かを一方的に言うことではない。伝えたいことがわたしから切り離され、てくてくと歩いていき、相手に届いてくれるわけではないからだ。

伝えるということは、わたしがあなたのところまで歩いていくことである。いや、あなたの中にまで入り込んで、じたばたすることである。それが手紙やデジタルメッセージであつたとしても、わたしから切り離された何かに情報を載せるのではなく、わたしをわたしから削り取って、あなたの中にまで入り込もうとする。

だから伝えることは、本質的にあなたの領域を侵すことである。それはうとんでもない試みだ。どんなに注意を払ったとしても、

あなたの魂たましいに腕うでを突つつ込んで、わたしの欠片かけらを届けようとすることになる。あなたの魂は、わたしの熱い腕でびりびりに破やぶけて傷きずつくだらう。

わたしたちの心は、思いは、原理的に伝わらない。だが、届いてしまうことはある。届いたことを感じられるときがある。届けられてしまったと、痛む魂をふるえる指でおさえるときがある。あなたの思いのすべてはわからない。だが、あなたの腕がわたしの魂に入り込んだ、その痛みを感じている。あなたの欠片がわたしの魂の奥おくまで分け入ってしまったて、もう自分では取り出すことができない。指でまさぐって探すが、ひどく狭くて見つけれられない。なぜあなたはこんな場所に入り込めたのかと、不思議にさえ思う。

（永井玲衣『世界の適切な保存』より）

問一 部1と4のカタカナの部分で、漢字に改めなさい。一画ずついいねいに書くこと。

問二 部ア『伝わらない』ということとは悲劇であり喜劇である。」とありますが、シンポジウムの話と、検収センターの話では、どのような点が喜劇だと考えられますか。それぞれ説明しなさい。

問三 部イ「魚は閉じるまぶたを持たず」とありますが、筆者は魚との対比によって人間についてどのようなことを説明していますか。答えなさい。

問四 部ウ「とんでもない」とありますが、筆者はなぜ「とんでもない」と考えていますか。説明しなさい。

A
国語

25

解答用紙

受験番号

氏名

一

問一

--	--

問二

--	--

問三

--	--

二

問一

--

2

--

3

--

4

--

問二

シンポジウムの話

--	--

検収センターの話

--	--

問三

--	--

問四

--	--